

アリストテレスと南方熊楠

——森の中で生まれた二つの思想——

三村 泰 臣

はじめに

鶴見和子の労作『南方熊楠⁽¹⁾』以来、南方熊楠は偉大な思想家として位置づけられるようになった。彼はアリストテレスと同じように生物学や天体学などの自然科学分野に関心を示しただけでなく、学問的方法論を同じくし、森羅万象を全体的・統一的に考察した思想家であったという点においても共通するところが多い。更に、思想の核心的部分を森の中で形成していったというユニークさにおいても重なり合う。本稿では、主としてこの二人の学問的方法論を検討し、二つの思想の共通性とその現代的意義を明らかにする。

(1) アリストテレスの学問的方法論

アリストテレス(B.C.三八四—三二二年)はプラトンのアカデメイアに二〇年間学んだが、師の思想を忠実に受け入れることができなかった。プラトンの死を機に彼はアテナイを去り、自分に納得のいく学問を求めて小アジアやマケドニア各地を一二年間にわたって遍歴した。彼が遍歴した地方はアテナイとは全く異なり、豊かな森と海に恵まれていた。彼はこの恵まれた自然の中を旅し、自然を観察し人びとの生活の機微に触れながら独自の学問的方法論を完成した。

その方法論のひとつは「バイノメナ」(τὰ βαινόμενα)から出発するということであった。「バイノメナ」とはアリストテレスのテキストによれば①「感覚によって観察された事実」(πρὸς

φαινοίμενα κατὰ τὴν αἰσθάνου) と「う意味の他に、②「世上一般に行われている見解」(ἐνδόξα)・③「ある問題について主張され考察されている学説」(κερτοίμενα)・さらに④「ある言葉が用いられる際の指示・用法」など多くの意味を含んだ概念である。学者たちが議論している「学説」(κερτοίμενα)だけに頼るのでなく、一般庶民の持っている「通念」(ἐνδόξα)や自らの感覚によって観察された「事実」(φαινοίμενα)を重視することが学問にとって一層重要であるという点をアリストテレスは指摘した。

アリストテレスの方法論でもうひとつ重要な点は「われわれにとってより先のもの」(πρῶτον πρὸς ἡμᾶς)から「本性上先なもの」(πρῶτον τῇ φύσει)への認識に至るという点であった。そうして、最終的に人間と自然との間のつながりを全体的・統一的に明らかにしていくことであった。それは世界観を究めていくことであったと言える。

このように、アリストテレスの学問の方法論は、「パインメナ」を学問の出発にし、全体的・統一的な世界観を究めるという二点に要約できる。このため、アリストテレスの学校では、読書のみの知識ではなく、野外での体験が同時に求められた。⁵⁾

(2) 南方熊楠の学問観の形成

南方熊楠はもっぱら図書館に通い和漢洋の書物を読むことによって勉強をした。アメリカ留学中は「学校の図書館にのみつめ

きって図書を写し抄し」(『全集7』8頁)、ロンドンに渡ってからも同様のスタイルで「学問と決死」(『日記1』383頁)する姿勢を貫いた。大英博物館におよそ五年半つめきり、古今東西の一五〇万冊近くの文献から大判ノート五二冊一万頁以上にわたる通称「ロンドン拔書」を書き残した。

とはいえ南方の学問は書物から得た知識だけによるものではなかった。むしろそれ以上に野外での観察・採集などの体験を重要視するものだった。そのような態度は幼少時代の様々な逸話としても描かれているが、学問を志すようになってからは、E・モースの足跡を追って大森や鈴ヶ森などで本格的に観察・採集を行っている。米国のアナバーでは「ただただ林野を歩んで、実物を採りまた観察した」(『全集7』8頁)と述べているように、むしろ観察・採集の方にウエイトを置いていた。野外に出て人々の「通念」や感覚によって観察された「事実」を採集することが学問にとっていかに重要であるかという点をアナバー滞在時期に既に強く自覚している。友人杉村広太郎に宛てた書簡には「何にせよ学問は一生暇あればすなわちと出かけるべきなり」(『全集7』88頁)と語っていることから窺うことができる。こうした体験を重視する態度はスイスの博物学者ゲスネル(一五一六—一五六五年)の影響によるものであった。

以上のように南方は「学説」のみの知識だけでなく「通念」や「事実」などの体験を重視する学問態度を形成した。有名な平家

蟹の話に見られるように、この学問態度は南方が生涯を通じて持ち続けた学問の態度であった。⁽⁵⁾

ところで南方は一二歳で江戸時代の百科全集『和漢三才図会』

一〇五巻を全部写し取ったと言われる。この超人的な作業を完成させることにより、南方の内には三才、つまり天・地・人の間にあるつながりを理解しようという強い関心が生じ育っていった。

しかし、学校では彼の強い関心に対して納得いく示唆は得られなかった。それで南方は早々と学校にみきりをつけ、米国に渡ってアナバーで独学者となり納得のいく世界観を究めようと苦闘した。

この時期の南方に多大な影響を与えたのがライブニッツ（一六四六—一七一六年）であった。ライブニッツは世界を個々の原子の集合と見たデモクリトスの原子論や、部分によって構成される巨大な機械と見たデカルトの機械論に反対して、世界が生命を持つ有機体であるという世界観を提起した。世界はモナド（単子）より成り、おなじ生命を共有するひとつの生命体であると言う。

南方はライブニッツのこの世界観に強烈に魅せられた。日記には「ライブニッツの如くなるべし」（『日記1』368頁）と幾度も記している。

以上の通り、米国において南方はゲスネルとライブニッツから学問の方法論上極めて衝撃的な影響を受けた。友人中松盛雄に宛てた書簡ではその点に触れ「洋行後大いにわが行路を過たしめたるもの」（『全集7』115頁）はゲスネルに次いでライブニッツで

あったと告白している。

しかし、この二人以上に南方に大きな影響を与えたのがアリストテレスであった。既に述べたように、アリストテレスは「バイノメナ」を研究の出発点とした。彼は学者達の「学説」だけでなく、一般庶民の持つ「通念」や自らの感覚に基づいた観察による「事実」などを重視する態度を示した。また、アリストテレスはそのような「バイノメナ」を資料として全体的・統一的な世界観を見出すことを学問の方法論としていた。読書と野外での体験の両方を最も大切に、そこからひとつの世界観を構築してみたいと苦闘していた南方にとって、アリストテレスのこの学問の方法論は十分に納得できるものであった。アナバーの日記には、ライブニッツとゲスネルの名前に先立ってアリストテレスの名前を真っ先に掲げ、それを下宿の壁に貼って自ら鑑み奨励する一助としたと印象深く記している（『日記1』368頁）。このように、南方の学問観が定まったのはアリストテレスと遭遇したアナバーにおいてであった。

アナバー以降、南方はアリストテレスの方法論を踏襲し、当時最先端の学問であったダーウィンの進化論をはじめ古今東西の学問世界に一気にのめり込んでいった（『全集7』115頁）。それから米国から中米、英国へと旅を続け、また帰国後は熊野の森を徘徊して人文・社会科学と自然科学の両分野にまたがる「バイノメナ」（学説・通念・事実）を丹念に収集していった。その珠玉と

なっているものがロンドン拔書と熊野の森での粘菌研究であった。彼の思想は英国の学問との接触を通して磨かれ、そして熊野の森で完成することになる。

(3) 森の中で生まれた二つの思想

アリストテレスは一二年に及ぶ森と海の遍歴の体験で得た独自の方法論に立ち、アカデミアでの「学説」、豊かな自然の中で収集した「通念」「事実」など一連の「バイノメナ」を手がかりにしリュケイオンの森の中でひとつの世界観を体系化していった。その際、彼は従来の諸学説を紹介しそれを論駁しながら、個物は明らかに存在し、しかも運動・変化しているという具体的な理解を示していった。また、月下世界の個物は第一動者とのつながりにおいて存在し、運動・変化しているのだということを明らかにした。アリストテレスは「バイノメナ」を出発点にして思索し、万物は存在し変化・運動しているということを明らかにした。それを体系化したものが質料形相論と呼ばれているところのものである。

一方、一五年にわたる海外での旅の体験を終えた南方は、帰国するとすぐに熊野の森に引きこもり、粘菌を主とした生物学の研究を再開した。粘菌は特別に生と死の現象について豊かなヒントを与えてくれた。粘菌の生死から南方は人間と世界の実相に関する深い思索をめぐらし、誰にも及びもつかぬ独自の世界観を完成

させた。南方は世界を不思議と捉え、この不思議の実相を大乘仏教の哲理の助けによって明らかにした。⁽⁸⁾それは「南方曼陀羅論」と呼ばれている。

そこではこの不思議が物・心・事・理の四つの諸不思議と大日如来の不思議とが重層的に構成されたひとつの可知的な全体構造を持っていることをまず前提として示している。それを視覚的モデルとして示したものが南方曼陀羅と呼ばれる図である。こうした前提を立てた上で、続いて曼陀羅の構造についての解明を試み、「物」「心」「事」「名」「印」が大日如来の不思議の力によってどのように生じるかを明らかにしている。その場合「事」は「物」や「心」とは異なり形を残さないが、大日如来の中では「名」として残り、「心」に映ずるとき「印」として実在するものとなるのだと言う。したがって、世界は「物」「心」「事」「名」「印」のそれぞれ異なる構造を持つが、大日如来の不思議から見ればまったく同一にすぎないと考えた。つまり不思議は一即多、多即一の関係にあるとした。世界がふたつ(多)でひとつ(一)であるということを示したのである。また因果と縁起の理論では、森羅万象は因果と因果が複雑に絡み合って縁を構成していると言う。この因果と縁起の理論により南方は世界がひとつの運動体で、絶えず生死を繰り返すのちであるとした。

このように南方は森羅万象を不思議と捉え、それを曼陀羅として見立てることにより、世界がひとつのいのであるということ

を示したのである。南方曼陀羅論では世界はひとつのいのちとして絶えず運動・変化を繰り返す。その原因は曼陀羅としての大日如来の大不思議の中に内在する。

アリストテレスは物が存在し運動しているということは認めえたが、その原因を天上の存在に委ねた。しかし南方は物が存在し運動しているという点ではアリストテレスと同じであったが、その原理を物の内に認め宇宙万有・森羅万象をひとつのいのちとして理解した。

(4) 南方熊楠の思想の現代的意義

南方は曼陀羅というモデルを考えることによって世界の実相を解明して見せたが、それだけに終わらなかった。彼は、既にロンドン時代から「小生は何とぞ在家の菩薩となりて、一切世間に事をなしたし」(『全集』7「56頁」と望んでおり、学問というものは実践活動と結びつくものでなければならないと強く認識していた。従って彼は南方曼陀羅論を完成した後、熊野の森を自ら下って野の人となり、残りの生涯を実践活動に捧げる生き方を選択した。この活動は神社合祀反対活動としてよく知られている。⁽¹⁾

この反対活動の原理は既に南方曼陀羅論に窺われるが、主として白井光太郎宛書簡に明晰に語られている。その中で、南方は神社や森林を「秘密儀」(mystery) (『全集』7「562頁」とし曼陀羅として捉えている。更にその思想を我が国の山川草木にまで拡大し

「森羅万象すなわち曼陀羅なり」(『全集』7「565頁、同566頁」と述べている。このように、南方は神社や森林をはじめ宇宙万有・森羅万象を曼陀羅と捉えひとつのいのちと理解したので、緑の保護活動に全身全霊を傾けることができたのである。

このことから、南方熊楠の思想には現代の環境問題を発展的にカバーする思想の萌芽が見られ、アリストテレスの思想が待ち得なかったところの、地球環境問題に対する行動の原理を認めることができる。

むすび

アリストテレスも南方熊楠もその独自の思想を森の中で生み出した。いずれの思想も豊かな森が破壊されつつある状況の中で生まれた思想である。森の中で生まれた二つの思想はその方法も視点も極めて類似するものであった。しかし、熊野の森の中で生まれた南方熊楠の思想には、現代の地球環境問題を根底から解き放つ「尽きせぬ泉」⁽²⁾が隠されているのである。

(1) 鶴見和子『南方熊楠——地球志向の比較学——』(講談社、1978年)、同『南方熊楠』(講談社学術文庫、1981年)。

(2) John Pertin: *A FOREST JOURNEY—The Role of Wood in the Development of Civilization*, W.W.Norton & Company, Inc., 1987. (ジョン・パーリン『森と文明』安田喜憲・鶴見精二訳、晶文社、1994年、75-111頁)を参照。

- (3) 「バイノメナ」の意味については、G.E.L.Owen, 'réflexion et parolée', *Aristote et les problèmes de méthode*, Louvain, Paris, 1961, 83-103. を参照。
- (4) 『自然学』第一部「形而上学」1029b. 3~12. 『靈魂論』413a. 11~29.
- (5) アリストテレスの学徒はペリパトス学派と呼ばれた。これは回廊を意味したが、「ペリパテオー」(peripatētes) は歩き廻るという意味であり、野外に出て観察・採集することを重視したためではなかろうか。
- (6) 平家蟹の話をした後で、牧童や漁婦の言を「乞食ごとき態」で走り廻って丹念に採集したゲスネルのことを述べている(『全集』6, 58頁)。南方はゲスネルのこの姿勢に触れ強く感動し、日記に「日本のゲスネルとならん」(『日記』224頁)と記している。
- (7) この内容についてはG. R. Lloyd, *Aristotle — The Growth and Structure of his Thought*, Cambridge University Press, London, 1968. (G. R. D. ロイド『アリストテレス』川田殖訳、みすず書房、1973年、115-153頁)を参照。
- (8) 土宣法竜宛明治36年7月18日書簡(『全集』7, 336-384頁)を参照。
- (9) 南方は「金剛大日の一部心が白日滅心の作用により物を生ず。……」と述べ、大日如来の力を「作用」「反応動作」「力の応作」と呼んでいる。このところの説明は土宣法竜宛明治36年8月8日書簡(『全集』7, 385-390頁)の389-390頁を参照。
- (10) 同右391-392頁を参照。
- (11) これは明治政府によって行われた神社統合とそれと同時に行われた森林伐採に対する反対活動で、「エコロジーの立場に立つ反対活動」(鶴見)とされている。筆者は大山神社合祀の反対活動や神島

の保護活動などを神社合祀反対活動の一環とみなし、彼の思想の中から湧き出した「緑の保護活動」と位置づけている。

- (12) 安田喜憲『森のこころと文明』(NHK出版、1996年)94-113頁参照。
- (13) 鶴見、前掲書、241頁。
- (みむら・やすおみ、哲学・民俗学、広島工業大学専任講師)